

第21期事業報告

特定非営利活動法人 寺子屋方丈舎



事業趣旨

現在の小・中学生の長期欠席者数は252,825名で、うち不登校児童181,272名と、前年度より16,744名の増加がみられています（令和2年時点・文科省の学校基本調査結果）。こども・保護者の孤立防止やこどもの学習権の保障、教育機会をつくる場として、「フリースクール」は安心を基盤に創発的な学びを実践してゆきます。

事業目的

- フリースクールの目的は、自らの学びと育ちを自分で考える力を身につけることにあります。教科学習のみにフォーカスした知識のインプットに偏った教育ではなく、子どもたちの興味や好奇心に寄り添った学びを通して判断力を培い、気づきを深めてゆきます。私たちは、地域の子どもたちと一緒に学び方を変えてゆくことに努めてまいります。
- 不登校の経験は、自分で考え自分で決断する思考の世界と出会う場でもあります。自身の気づきに対し自分で考え、それを表現する（説明する）ことを重ねてゆき、自分の学びの成果を表現する場を目指します。

第21期をふり返って

第21期は参加者の変化に伴い場自体にも大きな変化があった年度と言えます。その根本的な対応として上記の施策を行うことにより、場の再構築が必要になってきている、過渡期であると言えます。一方、親の会は定期的に問い合わせ者があり、新規参加者がいる際にもリピーターが迎え入れ、対話しやすい雰囲気を作るという前年までにない様子がみられています。そのことで、仕事等の都合がありながらも「親の会に参加したい」と話す保護者も増えており、結果的に保護者同士の支え合いが生じていると言えます。保護者が肯定され、安心できる場を構築することにより、自分の子どもに肯定的な関わりを持てるようになるように、より多くの保護者の参加を促してまいります。

担当
鈴木 篤
小岩 真純

フリースクール

活動の目的

子ども一人ひとりが自身で考えて行動していくためには、自己肯定感を育むことが肝要です。それは個の活動の中だけで完結させては得られません。よって、この興味を尊重する一方で、他者とのつながりの中での活動を実施し、相互のフィードバックにより自己と他者への認知を深めることを大切に活動を実施します。

第21期の目標設定

- ・利用登録人数25名、参加率40%を目指す
- ・年3回(学期毎)の学校連携会議の実施
- ・親の会一回当たり8人以上の参加

成果

●高校生参加者の増加と、個別の目標意識の定着

高校生の新規参加者が増加しつつ、前年度から引き続きの利用者も継続して登録しています。その中で、昨年度から継続してきたプログラムに参加してきた高校生たちが、個別に生活の中での目標を持ち、それに向けて生活を送っています。その中で、高校生たちが自身の居場所としてフリースクールを利用するようになっています。それに伴い、現在ではプログラムの改変と個々の参加動機に関するヒアリングを進行させています。

また、フリースクールに通う親子の関係性作りのプログラムが定着しています。年末の忘年パーティ(親子12名参加)や春の入学式後の懇親会、夏の親子BBQ(親子14名参加)など課外活動を継続して実施。これらの保護者へ開いたプログラムの実施により、保護者の子どもの活動への理解が深まっています。

●小中学校の出席認定・学校連携

2019年10月以降、教育委員会との協議を重ね、2020年7月に教育委員会による出席認定ガイドラインが決定。現在、5つの小中学校から子どもの出席認定を得ています。

また、学期ごとの学校連携会議の実施のほか、課題を持つ家庭についてのケース会議を実施し、子どもと保護者を地域で支えるための活動を実施しました。

●こども個別の学習レポート予定・取り組み時間の確保

こどもごとの学習やレポート進行の予定立てが概ね定着しており、高校生が来室できない際にもレポートを進行させられる体制が整いました。またそのことで、学習・レポート時のこども同士の教えあい・学びあいがみられます。

●不登校親の会の実施

不登校とは何か、子どもの不登校を保護者がどのように受け止めるかを、保護者同士の対話から整理し、明らかにしてゆく「親の会」を月に一回実施しています。目標の1回あたり8名の参加には及びませんでしたが、リピーターの参加者が多くみられます。また、参加できない際にも連絡を取りながら相談・調整できる連絡体制が整い、そのことで参加意識の向上がみられます。

フリースクール

第20期実績

月	実施日数	登録人数	参加延べ人数	出席率(%)
10月	22日	11人	69人	29
11月	21日	12人	95人	38
12月	15日	13人	74人	38
1月	19日	13人	93人	38
2月	20日	13人	81人	31
3月	19日	13人	67人	27
4月	17日	12人	78人	38
5月	20日	12人	70人	29
6月	21日	12人	91人	38
7月	21日	12人	88人	35
8月	8日	13人	36人	35
9月	21日	15人	99人	34
合計	213日		941人	34

第21期実績

月	実施日数	登録人数	参加延べ人数	出席率(%)
10月	23日	15人	109人	32
11月	18日	15人	86人	32
12月	19日	16人	103人	34
1月	17日	16人	89人	32
2月	18日	16人	87人	30
3月	13日	16人	69人	33
4月	17日	14人	86人	36
5月	18日	14人	89人	35
6月	22日	14人	74人	24
7月	21日	12人	63人	25
8月	9日	12人	24人	22
9月	21日	12人	79人	31
合計	204日		880人	31

フリースクール



課題

●登録人数の向上

2020年10月現在の登録人数は14名と、目標の20名には及ばない状況です。ホームページの整理と親の会を中心にした周知活動により、見学者件数は増加しているため、目標達成のためには、見学から利用にかけて、活動内容が問い合わせ者によりクリアに伝わるよう対策が必要です。

- ①子どもがフリースクールの場について理解ができるよう、場のあり方を活字化し、子どもに提示する
 - ②見学者の相談対応の継続実施と、親の会参加への誘導を図り、保護者理解を深める
 - ②相談時の面談と体験・見学時のプログラム内容を策定し、相談・見学時の対応の精度を向上させる
- という対策を進め、目標達成を目指します。

●出席率の向上

20期全体の34%と比べ減少、特に後期の出席率低下が目に見えます。先述の高校生の変化に対し、高校生がより参加しやすくなる参加動機を測りかねていることが一つの要因となります。また、小・中学生の登録者と参加者の伸び悩みもその要因の一つです。高校生が多くを占める場に対し、小・中学生が日常的に利用し、活動の中で人間関係を築くことが困難な場となっていることは大きな課題です。

よって、小・中学生と高校生それぞれの参加動機を探りながら、活動のグルーピングとグループに合わせた活動内容策定が急務であると言えます。

寺子屋Hana事業報告

活動の目的

寺子屋Hanaはプログラミングを通して、こどもに内在する創造性をゲームやプログラムの形で表現すること、培われたプログラミング経験を活かし、参加者の関係性と技術が会津の各地域へ伝播することを目的としています。
会津若松市内の小中学生を対象に、ICTを用いて、すべてのこどもが地域社会に参画する機会を無償で提供していきます。

成果

- 第21期から開始した本事業について、利用者は延べ67人（11回実施）。一回の定員をおおむね8名とし、利用率は最大許容人数の76%となった。
- リピーターが多く、会津地域のプログラミングニーズの高揚に寄与している。講習内容、メンター、サポーターが定着している。
- 新型コロナウイルスおよびまん延防止措置の影響は、再流行の兆しが見られた1月の未実施、2～5月の広報規模縮小につながっている。渦中である3月の一時的な参加者増は、福島県広報誌「ゆめだより」の取材が申し込まれたことに起因している。
- 7月には市役所と協同で、大戸地区公民館にて出張事業を開催した。大戸地区では児童養護施設「会津児童園」からの参加申し込みもあり、より多くのこどもが利用できる足掛かりとなった。
- 9月には専用スタッフを採用し、プログラミングやICTの活用の特化する人員を確保した。これまでの月一回開催ではなく、毎週プログラミングの自習ができる環境整備をしている。

課題

- 現状使用しているIchigojamのほか、設置済みの3Dプリンター、レーザーカッターの利用開放に向けて、新コンテンツを策定する。
- かねてからプログラミング学習への意欲が高い湊地区、各小中学校でのプログラミング授業にも繋がりをつくる。
- コロナウイルスの縮小に伴い、最大定員を10名に引き上げる。フェイスブック、ホームページを利用した情報発信、近隣の小中学校への事業説明を行うことで、目標参加率を80%にする。

実施日	21期参加延べ人数合計
9月（開始月）	9人
10月	7人
11月	4人
12月	6人
1月	未実施
2月	5人
3月（取材有）	10人
4月	2人
5月	5人
6月	5人
7月	5人
8月	5人
9月	4人
合計	67人



フリースクールトレーラー



事業趣旨

郡山エリアの不登校児童生徒数は約700名。それに対して、学校外につながっている児童数は約100名程度で、不登校児童生徒の8割が学びの機会を損失している。私たちは、学校外の貴重な学び場として（1）自分で考える。（2）上手くいかないことを誰かのせいにもしない（3）自分が人に合わせることもしない（4）自分で気づいたことを素直に表現する。この4点を大事にしながら、コミュニティをつくることを目的にして活動している。

事業目的

- 郡山市内外にアプローチを行い、登録者数20名、出席率40%以上を目指す。
- 事業収入、寄付、助成事業により、事業の黒字化を目指し、持続可能な事業構造をつくる。
- 自分で必要な目的や、自分に対して肯定をする思考の枠組みをフリースクールで身につけ、社会の一員として参画していく。

第21期をふり返って

開所日時を変更し、送迎サービスも開始したことにより1日平均5人以上、出席率40%以上を維持できるようになった。月利用の出席率も平均80%を超えており、子ども同士の関係性も深まりやすい状況になっている。その反面、日利用の出席率が30%以下（学校と併用している子どもを除く）で、ひきこもり状態に陥り数ヶ月利用していない子どももいる。保護者とは定期的に連絡を取りあっており、今後も継続して関わっていく。

21期後半になり、子ども達の過ごし方にも変化を感じた。ゲームの時間が減り、新しいことに挑戦したい・将来に活かせることを学びたいというニーズが高まってきている。スタッフを飛び越えて、自分で学ぶ力を持った子どもは、知識を吸収しながら新しい挑戦をしている。大人が先導するのではなく、子どもが先導しながら学びをつくるという理想的な取り組みが可能になっているので、この意欲的な活動を今後ともくり広げてゆきたい

また、教育委員会、小学校、市内2カ所のフリースクールとも関係性ができたことは成果ともいえる。現状は情報共有程度だが、今後は合同の研修会などを実施して、地域で子どもを支えられる体制を目指していきたい。

担当
大竹 佑佳
小関 翼

フリースクールトレーラー

活動の目的

- 子どもの主体性を尊重し、挑戦する心と、振り返りによる吸収する力を大切にする。
- 地域で創造できる居場所を目指し、教育機関や他のフリースクール、支援者や地域住民との連携を大切にする。

第21期の目標設定

- 子ども同士の自発的な学びの促進と、持続可能なフリースクールを目指すために利用登録を15名まで増やす。
- 学校や教育委員会との連携を深めてゆき、地域の中でどのような活動をしている団体が周知されることで、子どもたちにとって最適の学びをお互いに紹介できるようにする。
- 親の会を定員数（8名）の参加を目指す

成果

- 登録者数13名、1日平均5～7名利用、出席率平均40%以上

1日の利用者数が5名以上になったことで、子ども同士の交流が盛んとなり、プログラムの企画力ならびに参加率が向上。1日の利用平均が上昇したことで、月利用の出席率も平均80%を超えている（送迎不可など家庭の事情を除く）。

フリースクール内での過ごし方も変化してきている。1日中ゲームを行っていた子ども達が、ゲームの時間が減少し、企画を自分たちでつくるなどの、話し合いが生まれてきている。小学生の特徴は、「学校にいかなければいけないという」思い込みが少ないことだ。自分自身を責めることも少なく、本音で話をしたり、人と関わるまであまり時間を要しない傾向がある。スタッフが心がけることは一緒に学び考えて、行動する。「とりあえずついてこい」という上から目線は嫌われる。子どもとスタッフは対等であり「あなたの関心を教えてください」という姿勢を大事している。

子ども同士が、遊び始めるとオンライン（e bord）を使って教科学習をはじめると子どもも多い。やはり、子どもは学びが嫌いではなかったと実証され得る瞬間でもある。

- 家族間コミュニケーションの変化

家族以外の第三者とつながりながら学べるようになると、子どもたちの語彙力や表現力、音楽などへの関心領域も広がってくる。その結果、家族とのコミュニケーションもより円滑に進むようになってゆく。

「頼れるのが自分だけ」ではなく「頼れるのは自分以外にもいる」と誰かができることを、あえて自分がやる必要もないことに気がつき、余計なことに付き合うのではなく「自分への集中心力」が高くなる。

- 学校、市内フリースクールとの連携

不登校問題で一番の課題は、特に学校にゆかないことを問題ではないと思っている当事者の子どもに対して、「支援者」が必要だと思い込ませてしまうことだと考えている。不登校の子どもたちに必要なのは、自分を特別視しない環境である。それに対して、特別視しながら関わる人が、子どもたちに遠ざけられている。

学校や他のフリースクールと連携してゆくことで、子どもたちを特別視しない、柔軟さの視点を広げてゆきたいと考えている。それと同時に、学校ゆく以外の選択肢は、学校にゆかなくなって初めて手に入れることができるものだという事も大事にしてゆきたい。

次年度内に教育委員会、フリースクール3ヶ所による合同研修会を実施予定。

フリースクールトレーラー

第20期実績

月	実施日数	登録人数	参加延べ人数	出席率(%)
10月				
11月				
12月				
1月				
2月				
3月				
4月				
5月	14日	0名	1名	
6月	16日	0名	11名	
7月	16日	3名	16名	33%
8月	6日	3名	9名	50%
9月	14日	3名	16名	38%
合計	66日		53名	

第21期実績

月	実施日数	登録人数	参加延べ人数	出席率(%)
10月	17日	3名	17名	33%
11月	14日	6名	31名	36%
12月	16日	6名	33名	34%
1月	16日	6名	34名	35%
2月	17日	8名	51名	42%
3月	17日	8名	44名	32%
4月	19日	9名	62名	36%
5月	17日	10名	66名	38%
6月	22日	12名	106名	43%
7月	18日	12名	77名	38%
8月	8日	12名	36名	40%
9月	20日	13名	116名	44%
合計	204日		673名	

フリースクールトレラー



課題

- 登録者増加に伴いスタッフ2人体制変更。それにより、受け入れの人数はさらに増やすことが可能になった。今後中学生、高校生、年齢まで対応が可能になってきたので、経営的にも今後さらに安定することが期待される。小学生以外の年代へのアプローチが課題となる。
- 登録者には、経済困難な家庭の子どもも一部存在するので、他の助成金との併用で通える条件整備を行うほか、自治体への政策提案も行い、何らかの助成が可能な方策を探る。
- ボランティアスタッフの減少。高校生から、社会人まで、多様な大人が関わり合いながら、お互いの中で気づき会うことが子ども達にとっては一番の学びになるので、ボランティアを増やしてゆきたい。また、子どもに差別や偏見を持たずに関わる、大人を増やしながら、より多くの子どもたちに「学び」を「場」を提供したい。

オンラインフリースクール

活動の目的

全国で18万人を超える不登校の子どもの中には、立地やコミュニケーション等の課題からフリースクール等にも通うことのできない子どもたちもいます。安心のできる自宅から他者と繋がり、学びあいを行うことを目的に活動を実施します。

第21期の目標設定

・利用登録人数10名

月	実施日数	登録人数
10月	3日	6人
11月	2日	6人
12月	1日	6人
2月	7日	5人
3月	9日	5人
5月	3日	3人
6月	10日	3人
7月	5日	3人
9月	4日	3人
10月	10日	3人
11月	4日	3人
合計	58日	

成果

●多年代の子どもの対話

小学4年生から中学3年生が参加。年齢や居住地、興味など多くの差異がある中で、対話を通して活動内容を模索しました。そのことで、相互理解に努める姿勢が生まれ、家庭以外の居場所を持たない子どもであっても互いを受容しながら過ごせる居場所となりました。

●コミュニケーションの活発化とコミュニティの成立

ヒアリング等を通して様々な活動内容を検討する中で、子どもの要望の多い「マイクラフトでのまちづくり」に取り組みました。コンセプト等を話した上で活動することで、共通の目的意識と個々の役割が生じ、協力をし合いながらの活動となりました。そのことで、はじめは発言のなかった子ども同士も会話が発活になり、オンラインを介したコミュニティが形成されました。

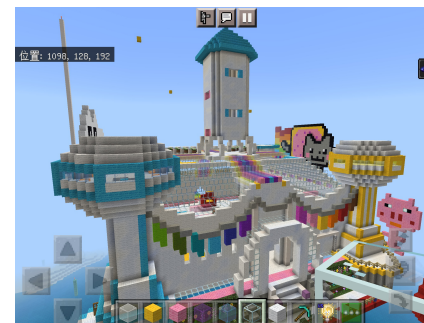
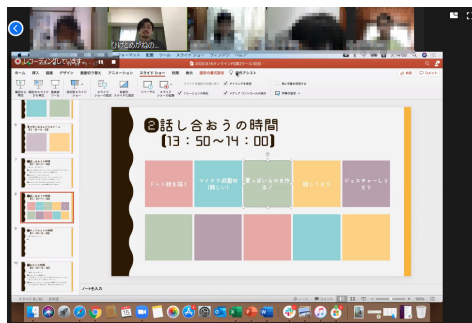
課題

●コンテンツ内容

子ども間での要望を合わせて現在の内容となりましたが、他の活動が実施されづらく、新しい学びの提供ができていない現状です。

●登録人数の伸び悩み

フリースクールなど新たな選択をして当事業への参加を休止した子どもが見られましたが、その後の利用者数の上昇が見られませんでした。オンラインでの広報活動の課題のほか、上記のコンテンツ内容に関し、多様化が困難であることが新たな集客への課題となっています。



担当
鈴木篤

こども食堂事業報告 会津若松市 相生・城西・飯寺・大町地区 4ヶ所

活動の目的

継続的に、自分たちでつくる食事をとおして仲間との共感や料理をしたことで得られた発見から、自主性と共に自己肯定感や感性を育みます。
困難を子どもたちと解決しながら、話し合いをつうじて学びを蓄積してゆきます。

成果

- 第20期の利用者は延べ1769人（233回実施）。第19期の926人（166回）から比較すると1.9倍に増えた。それに対し、ボランティア参加延べ人数があまり大きく変わらない（457人→489人）。継続して利用していることも同士の関係性が強くなっているのではないかと推測する。
- コロナ渦の一斉休校中（3月～5月）は会津地方では感染者が少なかったため、「こどもの居場所」を優先し、保護者にも説明や署名をいただいたうえで運営をした。（公共施設を除く）
休校中の利用者が増えたことから、学校外の居場所のニーズがある事が読み取れる。（その後も、感染症拡大防止対策を徹底しながら継続している。）
- 学校外の居場所ニーズから、2020年6月より1ヶ所増やし（大町）、市内4ヶ所週6回となった。
- 夏休み中（8月）はキマチケを配布し、市内の飲食店で食事ができるシステムを作った。利用があったことから、潜在的な利用者がいることを把握した。
- 公式LINEを導入し、保護者や地域の方をはじめ寄付の方とも気軽に連絡が取れる環境を作った。

課題

- ボランティアの継続参加、教育が課題である。
3月4月に伴う卒業や異動、5月以降はコロナの影響により、ボランティアの数が減少傾向にあった。ボランティアの再募集と継続性を高めるための日常的なミーティング、が必要。

月	19期 参加延べ人数と 回数	19期 ボランティア参 加延べ人数	20期 参加延べ人数 と回数	20期 ボランティア参 加延べ人数
10月	70人 (14回)	56人	165人 (22回)	55人
11月	57人 (13回)	31人	143人 (22回)	49人
12月	48人 (9回)	34人	117人 (18回)	39人
1月	55人 (11回)	40人	109人 (18回)	40人
2月	48人 (15回)	46人	106人 (18回)	40人
3月	72人 (14回)	37人	171人 (19回)	58人
4月	57人 (9回)	34人	144人 (19回)	46人
5月	142人 (21回)	50人	146人 (15回)	30人
6月	94人 (20回)	35人	195人 (22回)	38人
7月	117人 (15回)	23人	237人 (26回)	35人
8月	26人 (5回)	16人	59人 (8回)	13人
9月	140人 (20回)	55人	177人 (26回)	46人
合計	926人 (166回)	457人	1769人 (233回)	489人

こども宅食事業報告

活動の目的

企業や地域の農家、家庭などから集めた食品をストックし、児童扶養手当受給世帯など、生活に困窮しているひとり親世帯を対象に、食料を無料で提供します。こども食堂を知らなかったり、知っているけどなかなか来てくれない困窮家庭でも、こども宅食だったら来やすく、潜ってしまいがちで支援が届きにくい困窮家庭に届けることができます。食の支援のみならず孤立の解消、安心できる居場所づくり、行政の支援への繋ぎなど、より手厚い支援が期待できます。

成果

- 実施当初、こども食堂の関係7世帯で始まったが、期末の9月では1回あたり約60世帯が利用し、実施回数43回、延べ利用者世帯数は823世帯、実世帯数は228世帯。
- 届いているこどもは延べ1553人、実数319人と推計される。
- 月2回の開催に加えて7月からは週3回の野菜のみの配布も始めた。
- 利用者登録の分析の結果、ひとり親世帯の利用割合は約4割と、目的に沿った結果を残している。

課題

- 想定以上の利用者の増加への対応
資金面はもとより食品提供者の開拓が急務である。また、食品の運搬・設置などに係わる人材不足も課題としてあげられる。
助成金の活用や広く市民への寄付の呼びかけ、食品回収用のフードボックスの設置、スマートホンを利用したオートロックキーによる配布作業の自動化などを今後実施してゆく。

月	20期 参加延べ人数と 回数	20期 ボランティア参 加延べ人数	21期 参加延べ人数 と回数	21期 ボランティア参 加延べ人数
10月				
11月				
12月				
1月				
2月				
3月			13人 (2回)	1人
4月			73人 (2回)	6人
5月			72人 (2回)	6人
6月			76人 (2回)	7人
7月			175人 (9回)	26人
8月			178人 (13回)	16人
9月			236人 (13回)	22人
合計			823人 (43回)	84人

ジブン塾事業報告

活動の目的

準要保護児童の増加にともない、「お金がない」、「環境に恵まれない」というだけで失われている子どもの「学びの機会」を確保する。特徴は「グループ学習」。それにより「比較」ではなくお互いに学び合う繋がりをとおして、ひとりひとりの「学びたい」をサポートしてゆく。

成果

- 第20期の利用者は延べ182人（47回実施）。毎回5人程度の利用を想定して始めたが、3.9人にとどまった。コロナの影響で外出を控えていることも推測される。
- 一人ひとりがそれぞれのペースで学習に取り組んだり、ともだちと談笑したりと、学校や家庭以外の居場所としての機能を果たしている。
- 利用者は中学生に限定しているが、彼らが子ども食堂も利用し始めたことで、こども食堂がより安心できる場になった。いろいろな世代のこども達の居場所として。

課題

- 利用人数が少ない。
- 安心できる居場所にこだわるあまり、学習面での配慮に欠けていたところがある。ITを活用した学習サポートや、ボランティアの個性を活かして興味を引き出すような仕掛けをしてゆく。そして、それらをアピールポイントとして生徒募集の広報活動を行う。

月	20期 参加延べ人数と 回数	20期 ボランティア参 加延べ人数	21期 参加延べ人数 と回数	21期 ボランティア参 加延べ人数
10月				
11月				
12月				
1月				
2月				
3月			14人 (3回)	2人
4月			29人 (8回)	4人
5月			24人 (6回)	0人
6月			37人 (9回)	3人
7月			41人 (9回)	1人
8月			7人 (3回)	0人
9月			30人 (9回)	0人
合計			182人 (47回)	10人



こども食堂

以前の利用者はほとんどが小学生でしたが、ジブン塾の開設以来、中学生も利用するようになりました。

年代が違うことで、年上の子が幼い子を諭したり、ゲームを教えてもらうなどの機会が増えました。

さらに、高校生～20代の若いボランティアが増えれば、もっと楽しくて安心できる居場所になるでしょう。



ジブン塾

自分のしたいこと、しなくちゃいけないことを、自分のペースでやっています。

他の人に迷惑にならないなら、ゲームもOK!

休憩時間には、自分たちでおやつを作ったりしています。



こども宅食

いろんな方々からの寄贈で成立っている事業で、カルピスなどのメーカーからもいただいています。

利用者の方々との信頼関係のうえに成り立っていて、ボランティアとして配布の手伝いをされている方もいらっしゃいます。

なにより、皆さんの笑顔が嬉しいです。

2020年度寺子屋方丈舎冬休みお弁当提供プログラム 報告

Foresight in sight

- 目的 コロナウイルス感染症の影響で、家族が影響を受けて多忙化している子どもたちに冬休み期間中の食事の提供を行う。地域全体で子どもを支える仕組みづくり。
- 対象 会津若松市内に在住する小・中学生
- 事業主体 NPO法人寺子屋方丈舎
- 期間 2020年12月27日～2021年1月10日
- 協力飲食店 10軒
- お弁当提供価格 1食550円
- 実績 111食





事業趣旨

3.11後、子どもの心身の健やかな発育を促す外遊びや自然ふれあい体験の重要性が改めて見直されている。

復興に伴い、こども達の遊び環境も改善してきている。

子ども達が「自らの責任で自由に遊ぶ」をモットーに、自然素材を使い、プレーリーダーや地域の大人が見守る中で、自由な発想で生き生きと遊ぶことができる遊び場を設置し、管理運営委業務を実施する。

(福島県子どもの冒険ひろば設置運営業務委託事業)

事業目的

- 会津地域に住むすべての子どもたちが、「自分の責任で自由に遊ぶ」場を提供し、学校や既存の関係を越えた新しいつながり・遊びに飛び込む機会を支援する。
- 定期的な開催を周知し、「冒険ひろば」だからできるコミュニティの継続をはかる。
- 子どもを場づくりの主役として、学年や属性に関わらず、集まった子どもが等しく自分のしたい遊びができる空間づくりのファシリテートを行う。

第21期をふりかえって（大竹）

1年を通して担当いたしました。

3年以上リピーターしている子も、たまたま通りかかった子も、週に習い事がたくさんの子も、実は学校休みがちな子も、いいことがあってウキウキハッピーな子も、しょんぼりモヤモヤな子も、いろんな背景を持った、0才～小学6年生と地域の高校生や大人と一緒にいる空間って、実はそう多くないんじゃないかと思っています。

例えば、鬼ごっこのルールを話し合うなかで、低学年の子を「弱いから入れない」じゃなくて「どうしたらその子も楽しめるか」と考えたり。

例えば、なわとび二重とびに挑戦している上級生を見て、「苦手」から「やってみる」に変わった子がいたり。

例えば、球技が苦手な大人が「サッカーボールってどう蹴るの？」と小学生に教えて、そのあと一緒にプレイしたり。

いろんな人たちが《楽しい》を一緒に創っていく場に出会えて、感謝です。

冒険ひろば

活動の目的

(大切にしていること)

- 自分の責任で自由に遊ぶ
- 遊び場のルールは話し合いで決める
- お互いを大切にする

月日	活動日数	利用者延べ人数	1回開催あたりの利用者平均	アシスタント参加延べ人数
2020年10月	5回	30人	6人	2人
2020年11月	1回	10人	10人	2人
2020年12月	1回	8人	8人	2人
2021年1月	1回	5人	5人	2人
2021年2月	1回	10人	10人	2人
2021年3月	4回	89人	22.25人	6人
2021年4月	0回	0人	0人	0人
2021年5月	4回	94人	23.5人	6人
2021年6月	4回	90人	22.5人	8人
2021年7月	3回	58人	19.33人	10人
2021年8月	1回	18人	18人	5人
2021年9月	3回	63人	21人	15人
合計	28回	475人		60人

活動場所：大町中央公園

成果

- 参加者の増加傾向
(分析)
 - ・実施曜日の変更
…3月まで木曜夕方→5月以降、土曜日中に変更。家族で来やすくなった。
 - ・継続したアシスタント（ボランティア）の確保
…5月以降、会津てらこやネットワークやザベリオ学園高校から定期的な協力。
 - ・子育て世帯が利用の多い地域誌に掲載（5月、6月、7月、9月）
 - ・4月、近隣の幼稚園保育園・小学校にチラシ配布
…3年以上同じ場所で行うため、認知度が上がっている。
 - ・利用者による口コミ…学校の友人や従兄弟など、一緒に連れてくる。
 - ・立地がまちなかの公園…偶然通りかかった家族にも告知しやすい。
- 保護者アンケートの実施
 - ・子どもが「楽しい」「毎日行きたい」と言っている。
 - ・保護者目線からは、普段家庭でできない異年齢交流や外遊びができる。助かっている。
 - ・学校外の場で期待しているのは、「自分らしく過ごせる場を増やしたい」ことや「親から離れて夢中で遊べる場」「自然体験ができる場」など。

課題

- ボランティアは個人によって、経験や知識の差が大きい。
より安全安心の場を作るため、子ども観のすり合わせや危機管理強化を行う。
 - ふりかえりの見える化（蓄積）
 - 学習会の定期化
- 集まれるボランティアが当日のみ、または当日以前でも限られた時間のみ、が多い。
…所属に分けて事前打合せをしたり、担当ひとりでの備品の準備管理があった。
時間的負担⇒増。判断や想定が単眼的⇒リスク高。
 - コアに入るボランティアを決め、役割を設ける。
 - 準備のシステム化



事業趣旨

非日常の生活、自然を使った遊びや少し不便な環境の下、子どもたちが自立（自分の気持ちを知る）と共生（相手と一緒に何かをつくる）をテーマにお互いが相談しながら生活し、楽しさを感じながら活動することで、子どもたち1人1人の自己肯定感を育みます。

事業目的

学校外の場（安全で安心できる場）として、子どもたち皆が対等の立場で過ごせる場・純粋にその場を楽しめる場作りが必要であり、子どもの権利条約をふまえ、失敗してから学んでゆく事を大切に、物事に対して再構築できる試行錯誤力が求められています。

野外活動において、「お互いの創発的なアイデアを多層的にまとめながら学びを構築していくことで考えて行動してゆく力」「子どもたち自身が課題があることを不利に捉えずに、自分自身で課題を解決してゆく力」を伸ばしてゆきます。

環境教育では「子どもたちが能動的になる事」を目標にしています。ただ“楽しむ”ことは誰にでも出来ます。自遊学キャンプでは「楽しむことが学びにつながる」「楽しませてもらうのではなく、自分たちで楽しむ」ことを大事にして活動しています。

第21期をふりかえって

第21期もこれまでと同様に環境教育事業の1部を合同会社ストローハットに業務委託をし実施しております。コロナ禍での開催の難しさを痛感した1年となりました。事前の対策の開示、開催中の対応などを出来る限り見える化して実施してきましたが、まんえん防止重点措置の影響などもあり、夏休みの参加者は激減してしまいました。今後もwithコロナの対策を必要になってきますが、安心安産に楽しく、子どもたちに新しい発見があるように、子どもたちが毎日を楽しく過ごせる手助けになるように、事業を実施していきます。

自遊学キャンプ

活動の目的

自遊学キャンプは「子どもたちが能動的になる事」を目標にしています。ただ“楽しむ”ことは誰にでも出来ます。自遊学キャンプでは「楽しむことが学びにつながる」「楽しませてもらうのではなく、自分たちで楽しむ」ことを大事にして活動しています。

月日	活動日数	申込人数 (定員15人)	参加延べ人数	ボランティア 参加人数
12月26日～29日	3泊4日	8人	32人	2人
1月9日～11日	2泊3日	12人	36人	2人
7月22日～25日	3泊4日	17人	68人	3人
7月29日～8月1日	3泊4日	17人	68人	3人
8月5日～8日	3泊4日	17人	68人	3人
8月15日～18日	3泊4日	9人	36人	3人
8月21日～24日	3泊4日	8人	32人	3人
9月18日～20日	2泊3日	3人	6人	1人
合計	30日	91人	346人	20人

成果

【7月下旬～8月上旬の参加者増(申込率113%)】

コロナの影響もあったが、まんえん防止重点措置が出される前の申込率は113%に及んだ。潜在的なニーズが再認識される結果になったと思われる。

【参加者からボランティアスタッフへという流れ】

旧参加者が高校生になり、ボランティアスタッフとして参加する人数が年々増加している。またこういったボランティアスタッフ影響を受け、既存の参加者も「自分が高校生になったらスタッフになりたい」という影響を受けており、良い循環が生まれてきている。

課題

【8月中旬～9月の参加者減(申込率44%)】

まんえん防止重点措置が出されてからは、キャンセルが相次ぎ、参加者が激減してしまった。この方たちを次回の冬の企画に誘導して顧客の流出をなるべく抑えていく必要がある。

【ボランティアスタッフのスキルアップ】

ボランティアスタッフは確保できるようになってきているが、個々のスキル(特に安全管理の視点)がバラバラである。スタッフ研修の機会を設けて、スタッフ全員が同じ視点で安全管理を行えるような体制を築いてゆきたい。